

現代の青年の気質と課題

岩 崎 肇

目 次

はじめに

I 加速化する社会の変化

II 青年の心理と特徴

1 身体的な発育や変化への対応

2 大人に対する青年の批判

3 友人関係への適応

4 自我の確立と人生観の形成

III 現代の青年の課題

はじめに

人は誕生してからいずれは死を迎える。そして、誰もが少年時代、青年時代を通過する。不幸にして少年時代や青年時代を迎えずして亡くなる人もいる。いつの時代においても大人から青年へ期待や激励を込めた言葉が発せられる。時には、それが嘆き節になったりする。「今頃の青年のマナーや態度はひど過ぎる、まるでなっていない。」等がその例である。そういう大人自身も自分が青年の頃には似たようなことをいわれてきたのではなかろうか。そういう意味からは順送りかも知れない。今日、社会は大きく変化している。先に述べたように順送りと単にみてよいものか疑問をもつ。そういう視点に立って現代の青年にスポットを当てて考えてみたい。

I 加速化する社会の変化

十年一昔といわれた時代が今日では通用しないくらい、驚く速さで社会は変化している。少子高齢化、情報化、国際化、核家族化、価値観の多様化が一段と進む中で国民が共通の目標を失っているという人もいる。経済不況といわれながらも食べていけるから不思議である。青年のフリータ嗜好もその表れであろうか。少子化の中での子育ては、時に過保護や過干渉になったり、逆に放任となったりして、やがて、彼等が大人となった時に大きなツケとなって跳ね返ってくる。そのような中で現状から目を背ける青年を多くみかける。我々が若い頃は早く大人になりたかった。それは子供の時にはできないことが、大人になったらやれると言う夢が膨らむとともに、将来に対する期待感がそうさせたように思う。しかし、現代の青年は大人へなりたがらない。青年がモラトリアム化しているように感じられる。中にはいつまでも親と同居し続けるパラサイトシングルも増えていると聞く。このことは、青年が大人になることへの不安があるからである。そういう意味で青年の問題は大人の問題である。青年にとってモデルとなるべき大人がモデルになるどころか悪影響を与えることすらあり、大人になることへの魅力が青年に感じとれないからである。今こそ中高齢者がこれまでの経験や体験を活かして青年を真摯に指導することが求められる。周りが見て見ぬ振りをしないで、例えば、青年のマナーが悪ければ厳しく叱るいい意味の頑固な大人でありたい。

世の中が変化するのは、何も今に始まったことではない。この世の中で変化しないものは何もない。磐石と思われるこの大地だって、太陽だって、宇宙だって刻一刻と変化しているのである。だから、昔から「万物流転」と言い、「諸行無常」といつてきたのである。世の中が激変するからといって驚いたり、怖れたりする必要はない。それが当たり前のことだからである。重要なことは、こちらがその変化に対応して、どの位変化しうるかということである。変化とは別の言い方をすれば、変化を前向きにとらえる「勇気」と「柔軟な対応」であろう。それから、変化というものの捉え方で重要なことは全てを変える、又は、全てを変えないという両極端な考え方であってはならない。勇気を持って変化させるものと勇気を持って変化させないものがあり、そのことの判断を誤らない知恵が必要である。そして、変化への対応には将来を見据えながら三つの流れ（少子化、グローバル化、ソフト化）と二つの取り組み（選択、特色）を常に念頭におくことも大切である。

II 青年の心理と特徴

青年期には、中学生の時期、高校生の時期、大学生の時期があり、それぞれの時期の心理的特質には、かなりの違いが見られる。青年期は、子供から大人へと成長していく過渡期としての中間的な時期である。即ち、子供集団と大人集団との中間にあつて、一方では「もう子供ではないのだ」といわれ、他方では「まだ一人前ではない」といわれる。このような中間集団として青年期を捉えていけば、青年期の心理の様々な特質が理解しやすくなるであろう。青年期の心理的特質については、個人差がかなり大きいので、一般的な傾向として以下述べる。

1 身体的な発育や変化への対応

青年期は、身体的、生理的な発達の上で、極めて変動の多い不安定な時期である。身体的なエネルギーの活発さが目立つと同時に生理的な不均衡が生じやすい時期でもある。又、体位、体力上の変化と同時に、この時期には、内臓諸器官や性器の発達も著しく変化する。性的な発達については、いわゆる第2次性徴が際立ってきて、男子は、肩幅が広く胸が厚くなり、声変わりがみられ、射精の経験をもつ者も現れる。女子は、骨盤が広がり乳房が発達し、月経が始まり、体付きが豊満になる。このような身体的な発達の著しさは、同時に、過渡期に見られる不均衡を生じやすくなる。そこで、両親、教師、大人による適切な指導が望まれる。例えば、身体的な変化についての適切な知識を与えて、無用な不安や羞恥心を和らげること、特に性衝動に対する適切な態度やその昇華の方法について指導することなどは、極めて重要なこととなる。

2 大人に対する青年の批判

青年期には、大人に対する批判的な見方や考え方が次第に鋭くなってくる。特に親や教師の日常の態度や生活への批判をするようになる。その一部をあげると次のようなものがある。「もう少し、私たちの気持ちを理解してほしい」「自分たちの若い時と比べないで、今の子供は今の子供として理解してほしい」「自分の誤りを素直に認める心をもってほしい」「誠実で公平であってほしい」、このような青年からの批判は未熟で、依存的で、自己中心的で、現実的でない面もあるが、全てを否定してかかるのはどうかと思う。大人としては、子供の内面的な成長や心の動きを十分に理解しようとするだけの心のゆとりが必要である。表面的に激しい反応や批判の形をとるにせよ、もっと穏やかな過程をとるにせよ、いずれにしても青年は、次第に精神的に親から独立していく。この過程を、一般に「心理的離乳」の過程と呼んでいる。青年の反抗、親子間の葛藤と言う現象は、青年に対する親の深い愛情と理解があり、又、親に対する青年の深い信頼と尊敬とで結びあっている場合には、ほとんど目立たなく、穏やかに通過する場合もある。しかし、その場合であっても「心理的離乳」の過程は進んでおり、このことから青年自身の心の中には、程度の差こそあれ、悩みや苦しみが伴う。青年はこのような親からの独立を図っていくものであり、心理的離乳は大人の世界へと成長していく道標になるので、心理的離乳の度合いに応じた大人の青年への接し方が大切になる。

3 友人関係への適応

友人関係は、青年期における人間関係の中核である。青年は互いに心を打ち明けて、喜びや悩みを共に分かちあうことのできる友人、時には批判し合いながらも、共通の人生目標に向かって歩むことのできる深い関係の友人を渴望している。ところが、青少年意識調査から見ると心を打ち解けて話し合える友人を持つ割合が年々減少してきている。親しくなった友人から裏切られたり、失望させられたりするものが怖くて最初から表面的な友達でいる場合があるようである。深い友人関係をつくり上げてい

くには、それなりの時間とかかわりが必要である。互いに自己主張をしながら相手の立場や言い分を聞くことで成立するものである。時には意見交換をする中で喧嘩になることもありうる。「雨降って地固まる」の如く、時には双方が精神的に傷つき合うことも当然であって、そのことを怖れては友人の間は深まらない。

青年期には、同性の友人ばかりでなく、異性への関心も強くなってくる。特に、先にも述べた身体的な発育が急速に始まり、また早期化してくるに伴い、性的な成熟も早期化の傾向が見られる。最近の社会事情の急激な変化や目を覆いたくなるような性情報、性的な事柄についての解放を促すような社会的風潮などの影響に伴い、青年の異性意識にも著しい変化が起こっている。このことについては個人差があり、個々に応じた対応が極めて重要であると共に青年期における健全な人格形成上、この問題はなおざりにできないことである。

4 自我の確立と人生観の形成

青年期の心理的な発達は、いわゆる自我の発見や自我の確立を中心に考えることができる。青年期における自我の目覚めは、まず親や教師への反抗や批判と言う形で現れる。急速な身体的な発達は、青年に1人前の大人になったと言う感じをもたせ、同時に急速な知的な発達は、両親や教師や世間一般の大人たちへの批判を増大させる。こうして、青年は、独立的、自立的な行動への要求を感じ、自己を主張し、大人と同等の権利を獲得しようとする。しかし、大人たちは、青年の未熟さを指摘して、依然として子供扱いを続け、事々に干渉する。その干渉をはねのけようとして、青年は反抗する。このような青年期の特徴について、一般に「第二反抗期」と名付けている。自我の確立ということは、まず他人（他我）との対立を意識することから始まるが、青年の自己認識は、更に発展して、自己の創造と言う課題の展開へと進む。要するに、人格形成の過程と言うものは、絶えず自己をつくり直し、創造していく過程である。その意味で、自己の創造のための生みの苦しみもまた、青年期の特徴である。

青年期における自我の確立という課題は、また、「人間とは何か」「人生とは何か」と言う問いに連なっている。親や教師や一般の大人に対する青年の不満や批判の多くは、「大人は、現実に妥協しなければ生きていけないという。それでは、理想はどうなるのか」「大人は、いうこととやることが違っている。一体、真実、誠実、信頼ということは、どこに求めたらよいのか」という青年の人生観の問いかけなのである。青年は、まず親や教師や大人の生活の中に理想と現実とにずれのあることを感じているのであるが、やがて、友人や自分自身の中にある理想と現実の食い違いにも気付いていく。「人間とは」「人生とは」という問いかけは、結局「自分とは何者なのか」という問いに戻ってくるのである。

III 現代青年の課題

教育心理の分野の中で多くの学者が発達段階と発達課題について述べているが、E・H

エリクソン（アメリカの心理学者）は、人の一生を乳児期から老年期まで八つの段階に分けて、その各々に発達課題を想定している。彼は、青年期の発達課題は「自我同一性(ego identity)」の獲得であるといっている。自我同一性とはいわゆる「自分らしさ」のことである。青年には、様々な経験を通して「自分の個性とは」「自分の興味、適性は」「自分の人生における生きがいとは」などの問いに対する答えを持つことが期待される。そのためには、必然的に社会、そして自分を見つめることが求められる。青年期はモラトリアム（猶予期間）とも呼ばれるが、以前は子供時代が終わると、すぐに、大人としての役割を果たすことが求められたため、この期間はなかったと考えられる。現代の青年には十分なモラトリアム期間が与えられており、社会が豊かになった証明とも言える。しかし、価値観の多様化、あるいはインターネットなどあふれる情報に取り囲まれていることもあり、速やかに「自分らしさ」という感覚を自覚できにくいという現状もある。様々なことを経験すればするほど自分に一貫したイメージをもちにくく、自我同一性拡散の危険を伴う。

現代の青年を見るに、一概にいい切ると誤解を受けるし、当然のことながら個人差があるので該当しない青年もいるが、青年の幼稚化がとても気になる。幼いことは、可愛いと受け止められるが、青年には当てはまらない。今、青年に言いたいことは「幼児性からの脱却」である。幼児性とは幼い、未成熟、言動に自己責任を伴わない、社会常識が身に付いていない等がある。社会常識は、見よう見真似で自然に身に付ける場合もあるが、大人がきちんと教えることによって多くは身に付いていくものである。社会常識とは何か知らない青年もいるし、その必要性を否定する者さえいる。教わった経験のない社会常識はわからないし、どう対処してよいのかわからないのである。幼少期に当然しつけられているはずの「しつけ」や「社会常識」が、身に付けられないまま年を重ね現在青年期を迎えている青年を多く見かける。私は、そういう青年を見ると遅ればせながら教えている。注意された青年は、殆んどが素直に聞く。「おはようございます」「ありがとうございました」「しつれいします」「すみません」は、自治体の社会を明るくする運動の一つであるオアシス運動である。大人、子供、青年一人一人がオアシス運動を実行したら本当に住み良い社会、明るい社会が築かれるであろう。当たり前のことが、当たり前にできる人でありたい。

私自身が、今の青年とかかわって強く感じることは青年の読書離れである。漫画の類はそれでも結構読んでいるようだが、古典、歴史書、哲学書、文学書は敬遠されているようである。一冊の本との出会いが自分の考え方や生き方を変えたという話はよく聞く。自分なりに行間を膨らまし、創造しながら読書を楽しむ世界は格別なものがある。図書館の充実と共に是非、読書の面白さ、楽しさを奨励したい。

<参考資料>

生徒指導の手引き（改訂版） 文部省

教育心理学（佐藤泰正・海保博之・新井邦二郎 編） 学芸図書株式会社